くじゅうタデ原地域の植物

タデ原は、くじゅう連山の北側、標高1,000～1,100mに広がる面積約40ヘクタールの広大な窪地です。タデ原の中央を北に向かって流れる白水川や、周囲をとり囲むように連なる三俣山、指山や湯沢山より湧き出る豊富な湧水に涵養され、その大部分が湿原化しています。湿原には、その特殊な環境に固執する植物たちが生育しており、分布上貴重な植物も少なくありません。春から秋にかけて、湿原に咲く色とりどりの花たちは、ここを訪れる多くの観光客や登山者の心を安らげてくれます。

秋のタデ原とくじゅう連山

北方要素の植物

タデ原とその周辺地域で生育が確認された維管束植物は、シダ植物18科74種、種子植物80科493種、合計98科567種でした。標高が高く、平地に比べると気温も低いことから、コウヤワラビやリュウキンカ、エゾシロネなど、九州では希な北方要素植物が多く見られるのが特徴です。

コウヤワラビ

リュウキンカ（絶滅危惧IB類）

エゾシロネ（絶滅危惧Ⅱ類）

湿原にこだわって

タデ原には「レッドデータブックおおいた～大分県の絶滅のおそれのある野生生物～」（大分県　2001）に掲載されている植物が数多く生育しています。そのほとんどが湿原という特殊な環境にこだわって生き続けてきた植物たちです。これらの植物の生育環境を維持するため、タデ原では毎年春に野焼きが行われています。

サクラソウ（絶滅危惧ⅠB類）*

＊絶滅危惧の危険度の段階評価は大分県のものです。

コウライトモエソウ
（絶滅危惧ⅠB類）

貴重な植物を見守る

春から秋にかけて、湿原に咲く花を求めて、タデ原には多くの人々が訪れます。近年、湿原に木製の観察道が整備され、貴重な植物を間近に観察できるようになりました。タデ原はまさに自然の博物館。これからも絶えず生き続けていく自然の営みを、私たちも静かに見守ってゆきたいものです。

ツクシフロウ（絶滅危惧IA類）

シムラニンジン（絶滅危惧ⅠB類）

ヒゴシオン（絶滅危惧ⅠB類）

マイヅルテンナンショウ（絶滅危惧Ⅱ類）

ノハナショウブ（準絶滅危惧）

クサレダマ（絶滅危惧IB類）

硫黄山中腹から望むタデ原